

ピッピ



## ツバメの雛、保護から放鳥までの記録



## ツバメの雛、保護から放鳥までの記録

三宅 慶一

03年の夏、ツバメの雛を保護しました。飛翔訓練してのち放鳥に成功しました。その経過記録をご紹介します。

3男が下校時に巣から落ちたツバメの雛を同級生から譲り受け持ち帰りました。息子には常々ツバメの雛だけは持って帰らないようにといてあったのですが、それは、ツバメの雛の飼育は比較的簡単にできますが、放鳥を成功させることがとても大変だからです。

ツバメは自然界では日中ほとんど飛翔しています。そのため、保護飼育中に飛翔力をつけなければなりません。籠での飼育は不適切であるので飛翔できる広い室を用意しなければなりません。また、ツバメは夏鳥であるので秋までに放鳥しなければなりません。秋には「渡り」をするので、それまで健康状態は完璧にたもたれなければなりません。



(ツバメの成鳥の飛翔)

次に、ツバメの雛の発育が十分に達成されたとき、飛翔が十分にできることが確認できるまでは放鳥することはできません。ツバメの巣立ち雛の放鳥には、まず放鳥時期や放鳥場所を決めることで悩まなければなりません。私は大の鳥好き人間ですから、放鳥後、無事生き延びていけるかということを考えると大変悩みます。ツバメは、自然界では餌となる飛翔昆虫を捕食しなければならな

いからです。子ツバメが巣立ち直後からひとりで飛翔昆虫を捕食して生き延びていくことは非常に困難とおもわれます。しばらくのあいだ親ツバメが子ツバメに餌を与えます。子ツバメは親ツバメの援助を受け、学習して少しずつ生きる力をつけていきます。そして、捕食能力がつきやっとな一人前になりますが、その時点で独立するわけではありません。ツバメは、子ツバメ同士または親ツバメを含めての集団で生活します。私たち人間がツバメの雛を育てることができても、人間には巣立ち後の子ツバメに対して援助や教育ができません。ツバメの巣立ち雛の放鳥のそこの問題が一番難しいところであり悩むところがあります。私は、ツバメの雛については「安易な放鳥」が「死出の旅」にならないかと心配するのです。私は、野鳥の保護飼育に関しては自信をもって係わることができてとても楽しいことなのですが、ツバメの巣立ち雛の放鳥に関しては苦しいだけのことになります。

7月2日、息子が持ち帰ったツバメの雛はとても小さな雛でありました。「この雛はツバメの巣から落ちたもの」と聞かなければ何の鳥の雛であるか誰も分からないでしょう。それほど小さな雛でありました。羽は棒状のものしかはえていません。開いている羽は一本もなかったのです。



(7月2日、保護直後の雛の状態。目はずっと閉じられていた。翼の羽は棒状であり、その先は少しも開いていない)

この雛は丸裸同然なので、高さ約 2.5 杯の巣から羽ばたきもせず肉の塊として落下したとおもわれます。全身打撲や脚の骨折が予想されましたが、幸いなことに身体には何の損傷も認められませんでした。

雛に刺激を与えると口をкаろうじて開けたので、助かるかもしれないと希望を持ってカステラを唾液で湿らせたもの少々、白くて小さいミルワームと粒状の五分餌を与えました。しばらくすると、少し元気が出てきたので餌を少しずつ何回も与えていきました。その夜は孵卵器の天板が少し暖かいので、そこに置くことにしました。

保護第一日目、ツバメの雛の目は常に閉じられていたのでまだ目が開いていないとおもっていました。しかしその夜、目を少し開けたところを確認しました。だからこの日を孵化後 6 日令と推定しました。ツバメの雛の開眼は 6 日目であるといわれているからです。すると、この雛の孵化は 6 月 26 日と推定されました。

私の場合、いつものことですが、鳥の朝食を 9 時頃に遅らすために、夜は 12 時まで餌を与えました。「助かるかも」という希望は捨てていませんが、今までの経験からこの雛は翌朝には死亡していることだろうとおもって就寝しました。

7 月 3 日、孵化後 7 日令、朝 9 時、雛の生きていることを確認しました。しかも昨夜より元気であり、口を大きく開けて餌を要求しました。これなら育て上げる自信があります。今日から敷き藁の下にカイロを置くことにして万全を期しました。餌はミルワームと粒状に加工された 5 分のすり餌を選び、そして総合ビタミン剤を添加しました。

ほぼ同時期の自然界におけるツバメの繁殖例がありました。向かいのビルの軒下に営業中のツバメなのですが、6 月 29 日に 4 羽孵化したとおもわれるものです。保護ツバメより 3 日遅く孵化したことになります。この自然界のビルのツバメの育雛を参考にすることにしました（以後、「ビルのツバメ」と呼ぶ）。



(左写真7月5日の雛。右写真7月7日の雛。少しずつ翼の棒状の羽の先が開いてきた)

7月10日、孵化後14日令、3日から10日のあいだ雛は順調に成長が認められました。ツバメの雛を後日、自然界に放つには、ミルワーム以外の自然界の飛翔昆虫を与えなければなりません。また、ミルワームを多く与えると栄養障害を起こすことが分かっています。そのため昆虫採取にでかけました。畑と公園に行くとトンボがたくさん飛翔していました。トンボは採取が比較的簡単であり、食べごたえがあるので最適な飛翔昆虫とおもいます。このあたりのトンボはほとんど小型の「ウスバキトンボ」でした。まだツバメの雛が小さいのでトンボの頭を切断し、身体を3～4分割して与えなければなりませんでした。



(7月10日、左写真はトンボを切断し胸部の一部を投与するところ。右写真は雛の翼の棒状の羽の先がだいぶ開いてきた、また、からだ全体も羽で覆われてきた)



(ビルのツバメ、左写真 7月10日撮影、雛4羽。中央上部の雛の発育がとても悪い。右写真 7月15日撮影、雛は3羽となった)

7月13日、孵化後17日令、羽が大分はえてきたのでカイロの使用を中止しました。

今日は1日中雨が降りました。雨になると自然界では親ツバメの餌捕りが大変です。ビルのツバメの発育遅れの雛1羽が死亡しました。



(7月12日の雛)



(7月14日の雛)

7月15日、子育ての参考になるようにとビルのツバメの子育てを観察しています。親ツバメはトンボを雛に与えています。まる1匹の投与なのでトンボの受け渡しの失敗もあって、地上には数匹のトンボが落下していました。そのトンボは少し大きいサナエトンボのようです。前日まではトンボは落下していませんでした。与えていた餌は、小さな飛翔昆虫と小型のトンボであったので失敗はなかったものとおもわれます。落下していたサナエトンボは拾って持って帰り、我が家の雛に与えたことはいうまでもありません。その数日後からはトンボは落下していません。雛がより大きく発育したことで、飲み込むことを学習したためでしょうか。



(7月17日撮影、少し大きなサナエトンボです。受け渡しの失敗でトンボが口からはみ出していました。雛はまだトンボをつまんで食べることはできない)

7月17日、孵化後21日令、一般的にツバメの雛の巣立ちは孵化後21日～24日令といわれています。今は梅雨の最中であり雨がよく降ります。雨の日には、いくら巣立ち日令になっても自然界に放鳥できません。今日は雨が降りましたので自然界に放鳥しませんでした。巣立ちを想定して室内に用意した電線に乗せることにしました。すると、待っていたかのように羽ばたきをはじめたではありませんか。そして翼を屈伸し羽づくろいをしました。狭い巣から出られ、自由な行動がとれてとてもうれしそうでした。でも飛び立つことはありませんでした。



(7月17日 羽づくろい)



(7月18日 羽ばたいているところ)



ツバメの雛が食べやすく捕食しやすいとおもわれるイトトンボが近くの田んぼに生息しています。教育上必要性があるとおもわれたので採取して与えたところ、雛はよろこんで食べました。やわらかくて小さいのでとても食べやすそうでした。可憐なイトトンボを雛に与えることはとても心の痛む行為でありました。また、このほかに捕まえたハエ、アブも少しですが与えました(以後、「雛」を「巣立ち雛」と呼ぶ)。

7月18日、孵化後22日令、巣立ち雛はほんの少しですが自ら室内を飛びました。初飛翔です。しかし、ふらふらっと直線的に飛んで壁に当たって落下してしまいました。幸いなことに身体に損傷がありませんでした。今日の飛翔はその1回のみでした。小型のウスバキトンボはまる1匹投与になりました。



(左写真7月18日、右写真7月20日の巣立ち雛、翼と尾の羽が少し伸びてきた)

7月19日、孵化後23日令、巣立ち雛は、少し曲がって飛ぶことができました。その後、2度と壁に当たることはありませんでした。しかし、飛翔距離と飛翔時間はとても短いものでした。驚いたことに、まだ巣立ち雛なのに「土喰うて、虫喰うて」とぐぜりだしました。

7月20日、孵化後24日令、巣立ち雛は、室内をグルグル回転して飛ぶことができるようになりました。今日は雨です。しかも、しばらく降り続きそうです。梅雨が明けるまではなかなか放鳥する決断ができません。そのため、ビルのツバメの雛の巣立ちの日に我が家の巣立ち雛を放鳥しようと考えました。ビルのツバメの雛は今日で孵化後21日令ですが、この雛の巣立ちも梅雨の雨で延期されるのではないのでしょうか。最近、巣立ち雛の翼と尾羽が急に伸びてきたようです。



(7月23日の巣立ち雛)



(7月25日の巣立ち雛)



(7月25日、翼と尾の羽が伸びてきた)

我が家の巣立ち雛は室内を飛ぶとき“ピッピ、ピッピ”と鳴きながら飛んでいます。いつしか我が家のツバメの巣立ち雛には「ピッピ」という名前が付いていました(以後「ピッピ」と呼ぶ)。

7月26日、孵化後30日令、今日は朝から素敵な青空です。梅雨明けです。3日遅れのビルの雛(孵化後27日令)が今朝1羽巣立ちました。そのため、今日はピッピにとっても自然界への放鳥の適期と判断しました。ピッピは1週間も室内で飛翔訓練ができたこととなります。狭い室内を10回以上も回転飛翔ができています。飛翔能力に疑問をはさむ余地はありません。あとは、ピッピが飛翔中に飛翔昆虫を捕食できるかどうかです。私たちはピッピと一緒にとべ

ません。放鳥後の援助や教育ができないのです。その後はピッピの本能にまかせのしかありません。

「いよいよ放鳥です」 妻と保護に係った3男の3人で出かけました。放鳥場所は、左京区静市静原です。山間部の田園地帯を選びました。



( 静原の田園風景 )

それは、この環境には人が少ないこと、ここは広い田園地帯であり餌が豊富にあること、周囲は山々で囲まれているので遠くに飛んでいけないと判断しました。それと、ツバメがとても多く繁殖しているという理由からです。今もいくつかの家族集団があり、その集合体も観察されています。



( ピッピを握って放鳥場所に向かうところと握っている手を広げるところ )



(7月26日、初めての放鳥のようす。あたりを観察しているようす)

ピッピを握っている手を広げると喜んで飛んでいけようかと予想していましたが、まったく飛んでいく気配はありません。乗っている手を上下させても飛んではいきません。あたりを見渡しています。観察しているようです。

納得したのでしょうか、ようやく飛び立ちました。半径 50 ㍍、100 ㍍の円を描いて飛んでいます。予想より力強く飛んでいます。野生のツバメも近くに寄ってきました。並行して飛んでいます。ヘルパーになってくれるかと期待しました。「成功、成功これなら大丈夫だよ」と 3 人で話していましたが、しばらくするとピッピは私たちのところに舞い戻ってきたのです。



(飛び出したところと空高く飛んでいるところ、自然界へ初めての飛翔です)



(戻ってきたところと杭に置き去りにしたところ。4枚の写真は7月26日の放鳥時のようすです)

その後、杭に置き去りにして放鳥を何回も繰り返しましたが、そのたびに戻ってきます。戻ってきたあるとき、私が手を差し伸べず逃げたことがあります。すると、ピッピはそのとき偶然通りかかったハイカーの肩にとまったのです。今日はこのことで連れて帰ることにしました。しかし、よく戻ってきたもので

す。私には信じられないできごとです。



(左写真 7月 25 日撮影、梅雨明けを待つ発育十分なピルの雛。

右写真 7月 27 日撮影、ピルのすべての雛は巣立った。親に餌をもらうピルの巣立ち雛。このように巣立ち後の子ツバメはしばらく親から餌をもらう。まだ尾羽や翼が短い)

7月 27 日、孵化後 31 日令、放鳥 2 回目、今日は家族 4 人でピッピーに「さよなら、元気でね」をいう日です。放鳥成功後、小浜に魚釣りの計画を立てたのでした。

今日も手を広げてもすぐには飛び立ちません。あたりを見渡し観察しています。ようやくして飛びましたところ、昨日よりはしっかり飛翔しました。昨日より遠方まで飛んでいきました。野生化することを期待し 4 人で見守っていると、しばらくしてまた舞い戻ってきました。



(7月 27 日、放鳥のようす。左写真は飛び出したところ。右写真は戻ってきたところ)

飛翔中はピッピ、ピッピと鳴いています。親を呼んでいることと、自分の居場所を教えていることのおもえます。その後、何回も放鳥しましたが、回を重ねるごとに飛翔時間が短くなり、とうとう飛ばなくなり、私たちの足元の地面に着地するようになりました。このことでまた連れて帰ることにしたのです。この日はピッピを連れての小浜旅行となりました。

飛び去っていったとき、すぐにその場を離れると放鳥の完了です。いないあいだに目をつぶって逃げればよかったのでしょうか、戻ってきても振り切って逃げればよかったのでしょうか。家族で意見が分かれ迷うところでしたが、私たちを親や仲間とおもって戻ってきたとすると、ピッピを振り切って逃げることはできません。ピッピは目が開いたときから私たち家族の飼育ですから、私たちや人間になついても仕方ありません。ピッピはまず親鳥の顔を知りません。兄弟の顔も兄弟の体のぬくもりも知りません。よく考えてみると、ピッピは人間になついたのでなく、私たちがピッピを飼育してならしたのでもありません。ピッピが野生のツバメとともに飛んでいかず私たちのところに戻ってきたのは、ピッピにとって私が、私たち家族が親であり仲間だったのです。ピッピは親の私とともに生活し、家族の仲間とともに集団生活を送るものだったのです。今日それがよく分かったのです。

ピッピはいつか、私たちや人間以外に自然界には野生のツバメがいることを理解し、ツバメを仲間として容認するときがくるでしょう。そのとき、ピッピが私たちから離れていくのではないのでしょうか。それまでは巣立ち後教育、巣立ち後飛翔訓練として、私たち家族は親ツバメの役目、仲間の役目をしようと決めました。

これからはピッピを放鳥にいくのではありません。飛翔訓練と称して、静原の田園地帯の自然教室へ勉強にいくのです。午後の1時半から野に放ち自由に飛翔させます。そして、私たちは4時半に帰宅するのですが、そのときピッピに帰る合図をします。そして戻ってきたときは連れて帰ることにしたのです。1羽のツバメですが私たち家族は最後までピッピを見守っていくことに決めました。

近くのトンボ採取地が耕されたためトンボがいなくなりました。トンボが採取困難となったので、バッタに切りかえて与えたところ、いやいやですが食べ

ました。

ビルのツバメの雛、残り2羽（孵化後28日令）も今日巣立ちました。夜には2羽、巣に戻って寝ていました。

7月28日、孵化後32日令、飛翔訓練1回目、放鳥場所の位置を少し変えました。柵に架かっている紐に乗せ、ピッピを置くとすぐにその場所から離れ50cmほど距離をとって見守りました（ピッピをどこかにおくと、すぐには飛び立ちませんので）。そして離れたところから声を出してピッピを呼びます。すると私をめがけて飛んできました。今日はこの方法を何回も繰り返すという飛翔訓練をしました。

ビルの巣立った子ツバメ2羽、夜に巣に戻ってきました。

7月29日、飛翔訓練2回目、今日はピッピを手に乗せ空に向かって突き出すと、自分の意思で飛び出しました。今回はとても長時間飛行できました。遠くに離れていても私を確認し肩に腕に戻ってきます、うれしい限りです。ピッピの顔に昆虫の燐粉が付着していたときがありました。きっと何かの昆虫を捕獲したに違いありません。

ビルの子ツバメは夜には戻ってきませんでした。

7月30日、今日は仕事があるので飛行訓練は休みです。天気が悪いのでかえってよかったようです。バッタもトンボも採取困難となりましたが、コオロギの多数生息している場所を発見しました。それで餌をコオロギに変えることにしました。最初コオロギが大きくて食べにくいようでした。ミルワームはとても好きです。しかし多給はいけません。このごろあまり大口を開けないようになりました。小口でつまんで食べることができるようになってきました。室内を飛ぶ小さな飛翔昆虫が気になるようになってきました。

ビルの子ツバメは、夜2羽巣に戻ってきました。まだピチピチとよく鳴いています。巣に戻ってくることは今回が最後となりました。

7月31日、飛翔訓練3回目、



(7月31日、飛翔訓練。右写真は空高く力強く飛んでいるピッピ)



(7月31日、床に置いたコオロギを自らつまんで食べるところ)

ピッピはコオロギを好んで食べるようになってきました。今日、本格的な囁りを聞きました。手に乗っているとき糞排泄孔をこすり始めました。数日前にもそうしたことがありましたがまさかとおもっていました。今回で2回目ですからその行為は偶然ではなかったこととおもいます。ピッピはまだ小さいので性的興奮ではなく、なんらかの精神的肉体的変化が生じたためそうしたのでしょう。ピッピの体がすべて順調に発育していると判断し喜びました。

8月1日、孵化後36日令、飛翔訓練4回目、飛翔中の姿は野生のツバメと変わらないようになりました。目を離すと野生のツバメと区別が付きません。私の近くを飛ぶときはピッピ、ピッピと鳴いています。それで私が両手をひろげ「ピッピ、ピッピ」と呼ぶと、私の差し出した腕に帰還します。そして餌をもらい少し休憩して再び飛翔です。



8月2日、飛翔訓練5回目。



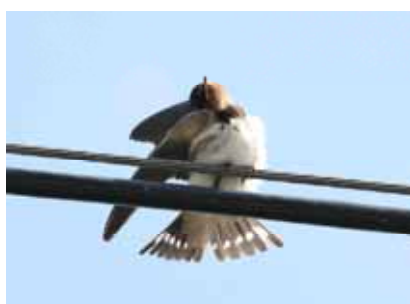
(8月1日、金属パイプに乗せて訓練)



(8月3日、ヒモに乗せて訓練)



(8月3日、左写真、地上において日光浴をしているピッピ。



右写真 7月27日撮影、巣立ち直後のビルの子ツバメの日光浴。ツバメは通常電線に止まり日光浴をする。ピッピはまだ電線に止まったことがない)



(8月1日撮影、ツバメが地上に降りて小石や草の繊維を採取しているところ、また、ついでに日光浴を楽しんでいる)

8月3日、飛翔訓練6回目、ピッピはすぐに私の手から飛び立ちます。ピッピ号は長く飛行し行方不明となります。相当遠方まで飛行しているようです。我が航空母艦に帰艦し、燃料を補給してまたすぐに飛び立ちます。ピッピはどのように飛ぶことを楽しんでいるようです。一度、静原在住の人の腕に止まりました。皆さんの理解と協力がほしいのでピッピのことを説明しました。それで、その後何人もの静原の人にピッピの存在を説明することになりました。私は毎日のように静原にきているので、何かの研究者とおもわれていました。

8月4日、仕事があり飛翔訓練できない日でした。室内を飛び回っています。餌を口のところまで持って行って与えたところ自分でつまんで食べるようです。ひとりで生活してほしいのですが、いつも人の傍がよいようで離れません。

8月5日、孵化後40日令、ピッピは朝からよく囀ります。飛翔訓練の予定でしたが、子供のためと天気が悪くなってきたので飛翔訓練はできませんでした。日に日に私になついて困っています。ひと時も離れられないようです。自立できるか不安が湧いてきました。

お客さんの肩や頭に乗るようになったので、今日から来客中は別室に放つことにしました。乾燥のままの「粒餌」を与えたところ食べるようです。これからは乾燥の餌を自らつまんで食べてもらうよう訓練です。

8月6日、飛翔訓練7回目、ピッピは、今日も朝からよく囀ります。朝はあまり食欲がありません。だけどよく遊びよく囀ります。就寝前はとても食欲があります。このことは朝の活動エネルギーは前夜に用意しているのではないのでしょうか。野鳥の早朝の囀りもまた、なにも食べずにしているのではないかとおもった次第です。

さて飛翔訓練ですが、籠のふたを開けるとすぐに飛び立ちました。飛ぶことが待ち遠しいようです。大分成長したと感じました。今回はしばらく戻ってきません。もしかして野生化かとおもいましたが残念ながら戻ってきました。今日は長い時間飛び遊んで行方不明のときが2度ありました。



(8月6日、左写真は草の繊維を採取しているところ。右写真は小石を採取しているところ。このことは誰にも教えてもらっていない)

8月7日、飛翔訓練8回目、今日は長いあいだ保護していたホオジロの放鳥をしました。ホオジロは籠の上部を開けるとすぐに飛びだし、林の中に消えていきました。その後2度と姿を現しません。夕方から雨が降りました。明日は台風とのことです。林や森は風雨をしのげますからホオジロは大丈夫とおもいますが、悪い日を選んでしまったと後悔しています。



(ホオジロ雌の放鳥の瞬間)

ツバメのピッピは戻ってきましたので連れて帰っています。いま、人工の餌の餌付けです。粒餌の入った容器を口元まで持っていくと、自分でついばんで食べられるようになりました。あとの課題は「自分ひとりで餌の容器のところに飛んで行って食べる」ということです。このことは、もし野生化できなかったとしたら我が家で越冬させなければならぬとおもいはじめたからです。

困ったことですが、ピッピは私(人間)からひと時も離れません。妻は、「ピッピがこんなになれたら野生化は無理だからずっと飼育しようよ」といいますほどです。

8月10日、孵化後45日令、飛翔訓練9回目、8日は台風でした。9日はまだ天気が悪いので訓練は休みです。籠の蓋を開けるとすぐに飛び出します。蓋を早く開けるとバタバタします。飛び出すとしばらく行方不明です。飛ぶことが楽しいようです。しばらくして戻ってきますが以前ほど餌をねだりません。この日はほとんど餌をねだりませんでした。自分で飛翔昆虫を捕まえているのでしょうか。野生化はもうすぐとおもえるようになりました。

8月11日、飛翔訓練10回目。

8月12日、飛翔訓練11回目、今日はピッピが手元に戻ってきても餌を与えないことにしました、といってもここ数日はあまり餌をねだってはいませんが、2時間半のあいだに一度だけコオロギ1匹を与えるだけで済みました。成長しているのだと実感できました。



(8月10日)



(8月12日)



(8月12日、水生生物の調査に)



(8月13日、昆虫採集、トンボ取りに)

8月13日、飛翔訓練 12 回目。

8月15日、孵化後 50 日令、飛翔訓練 13 回目、ピッピーが大分長時間飛べるようになってきたので飛翔時間を計ることにしました。このとき 1 時間ほどして雨が強く降ってきました。付近にはピッピーは見当たりません。心配になり家族 4 人で手をたたき、しばらくの間呼び続けましたところやっと戻ってきました。飛翔時間は 1 時間 15 分でした。雨が止んだので飛び立ちを促しましたが、疲れたのでしょうかもう飛び立ちませんでした。

8月16日、飛翔訓練 14 回目。

8月19日、飛翔訓練 15 回目、17日、18日は天気が悪く訓練は休みました。今日は天気がよいので訓練日和です。私ひとりで出かけました。ピッピーはすぐに飛び立ち行方不明となりました。それで私は 200 ㊦離れたカワラヒワがよくいる橋の近くで写真撮影をすることにしました。15 分ほど経ったでしょうか、ピッピーはそこにやって来ました。近くにはツバメも多数います。餌を与えず写真を撮っていると、そのうちいなくなりました。それから 1 時間たっても戻ってきません。付近にはツバメが多数いましたがその中にはいないようでした。その内、急に天気が悪くなり雨が降ってきました。土砂降りです。雨は 1 時間 45 分降り続けました。その間、ピッピーの名前を呼び、手をたたき周辺を必死に探しましたが見つかりません、戻ってきません。仕事があるのであきらめて帰ることにしました。帰るころ雨がやみホッとしました。土砂降りのなかでも野生のツバメは上空を飛んでいました。雨が止むとツバメが群れをなし飛んでいました。ピッピーも大丈夫だろう、とおもって帰りましたところ、妻と息子に怒

られました。「どうして連れて帰ってこなかったのか」、「この雨できっと死んだのでは」と。

8月20日 ピッピの搜索です。ピッピに会えるとはおもっていません。再会できればそれは奇跡です。奇跡は起こるものではありません。しかし、会えるか会えないかの確認が必要です。私は、写真撮影を目的に静市静原にとりあえず一人で出かけました。カメラをセットし、あたりを搜索し、手をたたいたりしました。15分ほどすると「ピッピ」と聞きなれた声がしました。その方をみるとピッピが私のほうに向かって飛んできたではありませんか。信じられません、起こるはずのない奇跡が起こりました。奇跡の生還です。23時間ぶりの再会となりました。

ピッピは戻るとすぐ餌をねだります。すぐにバッタの小さいのを3匹、コオロギ1匹を与えました。元気になって再び大空に戻って行けばよいのですがピッピにはその気がありません。相当疲れているようです。1時間ほど手に乗せてピッピのようすをみていると、羽の手入れをしきりにします。その合間々々に目を閉じます。疲れきっているようです。とても眠たいようです。夜をどこでどう過ごしたか分かりませんが、朝からはずっと飛び続けていたのではないのでしょうか。とにかく疲労回復させるために今日は連れて帰ることにしました。家に帰ってからは食欲旺盛です。しかし、いつものように室内を飛び回ることはありません。私にしがみついています。肩や手に乗ってはコックリコックリしています。連れて帰らなかったとすると、今日は疲労で餌も捕れず死亡したのではないのでしょうか。



(8月21日、ピッピの飛翔訓練に協力してくれる2男と3男)



(8月21日、ピッピの餌、トンボ取りに協力する息子たち)

8月21日、孵化後56日令、放鳥または飛翔訓練16回目、ピッピに疲れが残っているようにみえましたが、ピッピの体と精神が萎縮してはいけませんので訓練をすることにしました。籠の蓋を開けると喜んで飛び出していきました。2回目に戻ってきたときはびしょ濡れです。どうも水浴びをしたようです。ここには小川(静原川)が流れていて、ある場所で多くのツバメが水浴びをしています。そこで仲間に加えてもらい自然界での水浴びの方法を学習したのではないのでしょうか。そうするとピッピの野生化はある程度できていると考えられました。



(8月21日 左写真、妻の手に乗って日光浴をしているピッピ。右写真、トンボ取りに行く筆者と3男)

8月22日、孵化後57日令、放鳥または飛翔訓練17回目、ピッピは籠から飛び出すと、空高く舞い上がっていきました。相当上空まで飛んでいきました。

ピッピの姿は点と化したのです。これは初めてのことです。これだけ飛べれば野生化は確実とおもわれました。この日は家族4人です。私は皆に「これで飛翔訓練完了、放鳥完了、もう戻ってこないよ」と言い切りました。しかし、10分ほどの短時間で戻ってきました。その後、30分で2回戻ってきました。私の予測違いで家族に馬鹿にされましたが、次の飛翔が最後の別れとなりました。

8月23日、24日、26日、29日、9月2日と野鳥の観察をかねて、ピッピの搜索をしました。その後も日を置いて何回か静原に足を運びましたが、ピッピに2度と会うことはありませんでした。2回目の奇跡は起こらなかったのです。

ピッピの飼育に家族が協力してくれました。放鳥と飛翔訓練の八割は家族が同行してくれピッピを見守ってくれました。ピッピの保護、飼育、放鳥と成功したのは家族の協力があつたからこそ、と感謝しています。

今回のこの体験は、私たち家族にとって生涯忘れることのないすばらしいドラマの一つとなるでしょう。そして、この「ツバメの雛、保護から放鳥までの記録」が、皆さんの参考になりましたら幸いです。



(ピッピの飛翔訓練には、いつも子供たちは生物調査をかねて参加し、私は野鳥観察をかねて、また家族としてはピクニックをかねて楽しんでいました)



[ 付記 ]

私は、ピッピの飛翔中にはツバメはもちろんですが、その他イワツバメ、コシアカツバメ、カワラヒワの生態観察ができました。その一部をご報告します。

ツバメは飛翔昆虫を捕食することはよく知られていますが、なにかに止まっている昆虫を捕食することは知られていないようにおもいます。

ツバメが稲穂すれすれに飛び、軽くホバリングをしています。それを写真撮影して拡大し調べますと、稲穂に生息しているメイガの幼虫を捕食していることがわかりました。(8月13日撮影、幼虫を捕食するところとメイガの幼成虫)



カワラヒワが集団で稲穂に群がってモミをついばんでいます。モミはまだ乳熟期であり、モミをつぶすと白い汁がでできます。この乳熟期のモミを食べる鳥はニュウナイスズメがよく知られています。このカワラヒワの群れの中にニュウナイスズメが1羽混じっていました。ニュウナイスズメの繁殖は未確認です。カワラヒワの群れはこの時期でも100羽ほどにもなっています。



(8月16日撮影、モミの汁を食べる)



(8月19日撮影、群れの一部)



(8月13日撮影、ニュウナイスズメとおもわれる。繁殖は未確認、右拡大写真)

## 追伸

9月20日、近所の知人が来られ、信じられないことをいわれました。

「三宅さん、先日、三宅さんのツバメに会いましたよ」エッ、本当ですか、それはどういうことですか。「10日ほど前だったか、いや9月に入っていたことは確かですが、上賀茂橋の歩行者用の細い鉄製パイプの上にツバメが止まっているので、このようなところに止まるツバメは珍しい、三宅さんのツバメではないかとおもって手を差し伸べると、私の手の指に飛び移り恐がることなくしばらくじっと止まっていましたよ」元気でしたか、「はい、その後元気に中州のほうに飛んでいきましたよ」